

0歳～100歳までの在宅医療と地域連携を考える専門雑誌

創刊1号

0100

ゼロヒャク

在宅新療

THE JAPANESE JOURNAL OF HOME CARE MEDICINE FOR ALL AGES

2016

1

Vol.1 No.1

特集
はじめよう!
在宅医療

創刊記念四者座談会

在宅医療の未来像と
これからの輝き方を探る

横倉義武, 大島伸一, 辻 哲夫, 新田國夫

へるす出版

特集

はじめよう！ 在宅医療

在宅医療の向かう道

出前医者歴25年

専門医を途中下車して



医療法人アスムス理事長、
全国在宅療養支援診療所連
絡会事務局長

太田 秀樹
Ohta Hideki

胸に刺さった言葉

午 前中は外来診療，午後から地域へと
いうスタイルで在宅医療を始めて四
半世紀である。当時の往診は経営の足を引く
ものだったが，最近は外来，入院に次ぐ第三
の医療ともてはやされ，地域包括ケアシステ
ムのなかでいっそう期待される医療形態と
なった。かつては絶滅危惧種と揶揄されたも
のだが，国の保護政策で往診しかしないとい
う医者まで登場した。隔世の感と表現せざる
を得ないのが本音である。

私は1970年代に医師免許を手にした。各
県一医大構想が閣議決定され，年間の医師養
成数は倍増するといわれた時代である。どん
な病気でも，どんな患者でも診るような町医
者では食べていけなくなるから，専門医をめ

ざすようにと，先輩からも教授たちからも脅
されていた。とはいえ，クラブ活動に没頭し，
勉強はしなかった。留年を逃れてかろうじて
卒業したものの，内科や外科など王道とされ
た診療科に行く自信はまったくなかった。国
家試験の合格発表は，今とは違って5月末で，
進路を決めかねたまま卒業後は暇をもてあま
していた。そんなとき，麻酔科に入局したク
ラブの先輩に歌舞伎町で口説かれ，あっさり
麻酔科に入局した。とりあえず麻酔専門医の
道は開けたものの，手術を見ているうちに，
自らメスを握りたいと思いはじめた。そこで
整形外科に再入局し，やっと少しは勉強しよ
うと大学院に進んだ。その後大学の教員とし
て，また整形外科医として，救急医療なども
含め第一線でがんばった。開業に興味がな
かったのは，大学病院での最先端の医療が患
者にとって最善の医療だと勝手に思い込んで
いたからである。

ところが、あるとき身体障害者の連中の健康管理のため、海外旅行に同行を頼まれた。異国の旅という非日常の空間を共有し、何日間も寝食を共にすると、医師と患者の関係性を超えて旅の仲間となる。夜な夜な一杯やっていると彼らの本音も聞こえてきた。高熱が出ると力がなくなり、車いすでは診療所には行けないという話題が出た。「医者なんて、都合のいい患者の、都合のいい病気しかみないじゃないか」。もはや治すことができないさまざまな生活障害と暮らす彼らにとって、医者は決して頼れる存在ではなかったのである。あまりにも辛辣だが、その言葉は胸に刺さった。ほんとうに医療が必要な人たちは医療がない。元気じゃないと通院できない。こんな単純なことに気がつかなかったのである。機動力のある医療を求めている人たちはたくさんいるはずだ。これが、出前医者にトラーユするきっかけとなった。

人生をまるごと支える医療を届けに

在 宅医療のための開業。そのコンセプトを理解してくれる医者は誰ひとりとしていなかったが、老人たち自身に占拠されてしまった病棟で、老人たちが点滴につながれたまま、時には抑制され、おむつのなかに褥瘡をつくって、やがて肺炎で死んでいく。そんな姿は異様だと思った。自宅で安らかな天寿を全うすることを支える医者も絶対に必要なはずである。

老衰、認知症、末期がん、神経筋難病など、動く医療を求める人たちが在宅医療を求めて

くれた。自宅で最期をと願う何百人もの終末期医療も支えたが、すべての症例にドラマがあった。「医療とは医術を用い病気を治し、命を救うことである」、誰もが当たり前と思う医療のスキームを超えた「看取る」医療にも崇高な意義を感じた。疋田善平先生は「満足死」、石飛幸三先生は「平穏死」、メディアでは「尊厳死」と表現することもあるが、人の死は本来そうあるべきではないか。医学部劣等生が専門医を途中下車して町医者となったが、人生をまるごと支える在宅医療をとおして、少しは社会に役立っているかもしれないと、ほくそえんでいる。 ▲

2016年4月号では、特集として「在宅医療が地域の文化を変える 地域包括ケアは街づくり(仮)」(企画・構成：太田秀樹)をお届けします。「地域包括ケアシステム」という命題が与えられている現状での街づくりについて、地域×医療×行政がどう向き合い取り組んでいるか、幅広く論じていきます。

プロフィール

1953年奈良市生まれ。日本大学医学部卒、麻酔科にて研修後、自治医科大学大学院修了。同大整形外科医局長・専任講師を経て、1992年在宅医療を旗印におよま城北クリニック(栃木県)を開業。現在、機能強化型在宅療養支援診療所として地域包括ケアシステムの一翼を担う。医学博士・日本整形外科学会認定専門医・麻酔科標榜医・介護支援専門員。日本医師会在宅医療連絡協議会委員、全国知事会頭脳センター委員、厚生労働省検討会委員など。